

# 宮川 實教授のご退任にあたって

鎌 田 とし子

宮川 實教授は、1967年から1996年まで実に29年間にわたって社会学科に在職され、この3月ご定年で退職された。この長い年月の間には「大学紛争」が吹き荒れた時代も含まれ、決して平坦ではなかった。先生とは1年遅れでこの大学に勤務することになった私は、28年間を共に過ごしたことになる。身近にいた一人として、いま静かに先生の足跡を辿ってみたいと思う。

足跡の辿り方はその人との人間関係によって光の当て方が違って当然である。学問上の先輩や弟子であるならば、研究史を紹介しながら成果とその意義を中心に据えるであろうが、先生の場合は人口問題がご専門であったために、専門外の私では十分にその任を果たせるとは思えない。しかし先生の足跡の一端はご業績の流れの中にくみ取ることはできる。

宮川教授は東京大学文学部社会学科をご卒業後、旧制大学院に籍を置くかたわら1953年から厚生省人口問題研究所調査部に勤務され、のち主任研究官として通算13年間活躍されたので、ここで研究者としての問題意識と方法を身につけられたと思われる。その後1967年には東京女子大学に助教授として就任され、当時社会学界としては中核的な業績でもあり、また今後も永遠の命を保つであろう『佐久間ダム』（東大出版会・1958）、『ダム建設の社会的影響』（東大出版会・1959年）、『地方都市』（東大出版会・1961年）、『利根川』（東大出版会・弘文堂）等々、戦後日本の地域開発政策と「高度経済成長」によって、急速な変貌をとげた村落社会と国民生活を実証的に捉えるという大きなプロジェクト研究に参加され、研究の一翼を担ってこられた。

その後は人口学的視点を活かした住民・福祉・教育・消費・高齢者問題の研究へと進まれ、その成果を行政に反映させるという実践的課題に取り組まれたのであるが、先生の学風の特徴を挙げるとすれば、論理的でかつ手堅い実証に裏付けられなければ決して自説をアピールしないという、真摯さと地味さにあったと思う。

この研究生生活にみられる特徴は、実生活上の背骨にもなっていたと思う。かつて1968年から全国的に吹き荒れた「大学紛争」は、東京女子大学においても例外ではなく、むしろ他大学男子学生の応援団が押し掛けただけに熾烈を極めた。現在ののどかな学園風景からは想像もつかないであろうが、1号館と2号館は学生によって封鎖され、内側から机や椅子で堅固なバリケードが築かれた。授業は色とりどりのヘルメットをかぶった各派セクト学生によって、長期にわたって粉碎され、大学は全く機能を停止してしまった。学生の異議申し立てにはもっともだと思われる主張もあり、話し

合いで解決の道を探すべく、講堂で学生と教授の団体交渉が開かれたり、学内のいたるところで討論の輪が広がった。社会学科でいえば当時の中心メンバーであった宮川實・副田義也両氏が先頭に立っていたのだが、教授会での議論でも学生との討論でも決してごまかさない、つまり当面の問題解決のために「学生対策」的に動くことを一番きらっていたのは先生であった。そして学生たちの正しい主張に対しては真摯に耳を傾け、できるだけ改革していこうとして、学生・教授・職員三者からなる協議会を制度化することも提案しておられた。

しかし、後になるほどはっきりしてきたのだが、闘争学生の目的は「大学解体」「東女帝国主義解体」であったから、話し合いのテーブルに着くことさえ拒否され、先生の提案は実現を見ないままに終わった。だがこの当時の先生の活躍ぶりは、今でも私の目に焼き付いている。「論理と根拠の宮川」の定評はこの時のものである。またバリエードを教授団で突破しに行き、学生たちともみ合ううち、学生から「さわるなエッチ」とやられ、逆に学生に押し返されたときに「さわるなエッチ」とやり返して学生たちを困惑させたという「武勇伝」も残っている。いまでこそ笑っていただけるが、大変な時代であった。

降って1980年には図書館長を、翌年には文理学部長に選出された。折しも哲学科再編問題が山場を迎え、教授会は紛糾した。こうした問題はどちらにも言い分はあり、双方にとって万全という解決はむずかしい。ご本人としては最善を尽くされたのであろうが、当事者間の感情的なわだかまりはいつまでも残るものである。そうした時期に役職に就かれたことは不運としか言いようがない。誰があたっても感謝されたかどうかかわからないからである。

社会学科内部でいえば、つねに若い者の研究条件に配慮され、また海外での在外研究の機会があれば優先的に出してくださいと。その結果、大学院設置と絡んで先生の研究休暇は1年間に短縮されたばかりでなく、ご定年の前年になってようやく念願のパリに赴かれた。知る人ぞ知るで、先生は若い頃かの『にんじん』を翻訳された宮川實氏なのである。フランス滞在中農民の相続制度に関心を持たれ、資料も集められたようであるが、もっと早く行かれたならばと申し訳ない気持ちで一杯である。幸いご健康で退職されたことでもあるし、自由な時間が待ち受けているので、これからはゆっくりご研究に取り掛かれることであろう。

最後に、多くの学生を丹念に指導されてきた甲斐あって、いま卒業生達が社会の一翼を担っていきいきと活動しているという実績は、何物にも代え難いと思う。大学や教職員、卒業生達に多くの贈り物を下さった先生に感謝すると同時に、大学を去られた後の余生が平穏でみのりある「とき」をしづかに刻むことを、一同心から祈ってやまない。